



ハッピーバースデー

さとうまきこ作 小林与志画

ハッピーバースデー

まきこ 作 小林与志 画





著 者 さとうまきこ
発行者 岡 本 陸 人
印 刷 新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（オフセット）
製 本 株式会社難波製本
発行所 株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1 〒101
電話 03(263)0641〈代〉
振替 東京 3-64150

1982年5月第1刷

1982年11月第3刷

NDC 913

8393-16721-0027

さとうまきこ
ハッピーバースデー

あかね書房 1982

175p 21cm（あかね創作児童文学21）

©

1982 M.Satô Printed in Japan

落丁・乱丁本はおとりかえます
定価はカバーに表示しております

あなたは

まじめで はにかみ屋

ロマンチストで 読書家

そして……

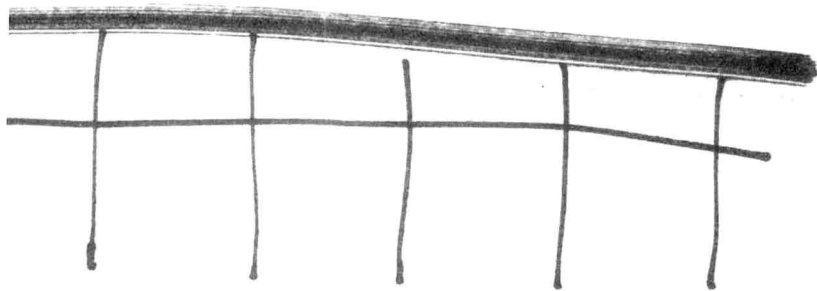
(八月二十四日～九月二十三日生まれ)

おとめ座



もくじ

- 1 おとめ座* 6
 - 2 ほんとうの答え* 40
 - 3 赤いリボン* 72
 - 4 沈黙^{ちんもく}とほほえみ* 102
 - 5 教室で* 129
 - 6 ハッピーバースデー……* 155
- あとがき* 174



そうてい・さしえ／小林与志



著者紹介

さとうまきこ



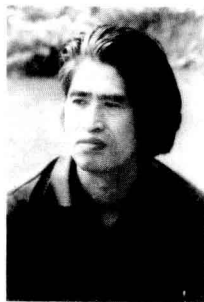
一九四七年東京に生まれる。上智大学仏文科中退。七三年、新鮮な感覚で少女の心理を描いた初めての創作「絵にかくとへんな家」で、日本児童文学者協会新人賞を受賞。最近の作品に「いけませんせい! いけません」「がつこうはどうぶつえん」「ねえきいてよ」等がある。

現住所 東京都世田谷区赤堤
3-34-22 ウエスト経堂205

画家紹介

小林与志

(こばやし よし)



一九二五年東京に生まれる。太平洋美術学校で洋画を学んだのち、六〇年ころから本の装幀、挿画の仕事を手がけ、陰影に富んだ作風で活躍中。挿画の作品に「絵にかくとへんな家」「十三歳の夏」「風のむこうの小さな家」「暗闇にうかぶ顔」はか多数がある。

現住所 東京都葛飾区東金町
1-36 公団住宅 一二二二五

ハッピーバースデー

さとつまきこ作 小林与志画



1 おとめ座



「水がめ座のあなたは、自由を愛する気まぐれ屋さん。そして、おしゃべりが大好き。よい友だちにめぐまれ、年上の人からもかわいがられます。ただ——」

そこまで読んで、ユカリはにやっと笑った。

「ただ何よ？　ねえ、早く読んでよ。」

じれったそうに、オトミがぐいぐい体をおしつけてくる。あぶなくいすから落っこちそうになって、ユカリは悲鳴をあげた。

「読むわよ、読むわよ。——ただ、勝ち気で口の悪いところがあるので、結婚は二十五歳過ぎになるかもね、だって。」

「びったりね。とくに口が悪いってところが。」

と、マコ。

「おしゃべりってところ。」

と、ヤマ。

「どうせ、あたしはおしゃべりで、口が悪いですよーだ。」

オトミがすねて、つんと横をむいた。

七月なかばの、ある日の昼休み。

長かったつゆもようやくあがったのか、久しぶりに、空はからりと晴れわたっている。

男子も女子も、給食が終わると、待ちかねたように校庭へとび出して、教室に残っているのは、ユカリたち四人だけ。

いつもは四人の中心は、おしゃべりでのつぽのオトミなのだが、きょうはユカリ、いや、ユカリの持ってきた星占いの本だ。

オトミは水がめ座。勝ち気で、おしゃべり。

マコはさそり座。ちょっぴり、やきもちやき。

ヤマはてんびん座。のんびり屋で、おしゃれ。

『ミニミニ星占い』——名前のとおり、手帳くらいの大ささしかないその本は、けつしくてくわしくはないけれど、三人ともけつこう性格はあっている。

「ところで、ユカリは何座なのよ。」

自分だけいわないのはずるい、とでもいうように、オトミがユカリの手から本をひったくった。

「あたし？ あたしはおとめ座。まじめで……」

その時、ガラッと戸があいて、ヤーヤン、ノンチ、オカチン、カンナ、マサ——クラスの女子十人あまりが教室に入ってきた。バレーボールでもしていたのだろう、どの顔もまっ赤で、ひたいにべったり、ぬれた髪がはりついている。

「オトミたち、何やってんの。」

はずみをつけて、歌うようにいいながら、ヤーヤンがヤマとマコの間に割りこんできた。

「星占い？ わー、やって、やって。」

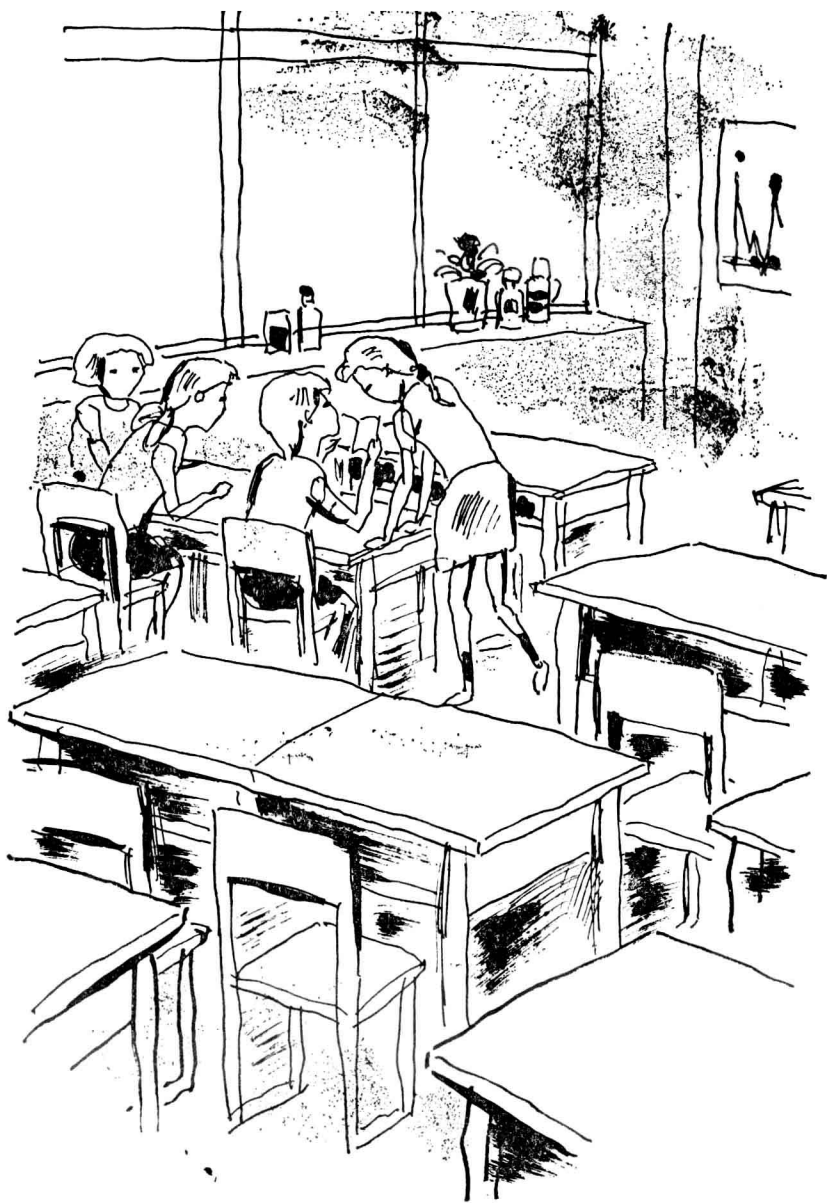
「オッホン。では、次のかた。お名前と生年月日をどうぞ。」

オトミがふざけて、易者のまねをした。素直にヤーヤンは答えた。

「矢部ミドリ。昭和四十五年八月二十四日生まれ。」

「八月二十四日？」

一瞬、ユカリは耳をうたがった。



「ヤーヤンも？ あたしもよ。あたしも八月二十四日生まれ。」

「あら、ほんと？」

ヤーヤンの大きな目が、おもしろそうにくるくる動いた。

「へーえ、ちっとも知らなかったわ。六年間、ずうっと同じクラスなのね。」

「じゃあ、ユカリもヤーヤンもおとめ座？ なあんだ、あたし、もう、星占い信じない。」

オーバーに、オトミがため息をついた。まわりに集まっていたみんなが、どっと笑った。

だって、ユカリとヤーヤンは、何から何まで正反対——。

女子の中で、一番背の高いヤーヤンと、一番チビのユカリ。

バレーボールでも水泳でも、ヤーヤンは運動なら、何でもござれ。ユカリは運動神経、まるでゼロ……。

性格となると、もつとちがう。

ユカリはどちらかといえば、無口で、ひっこみじあん。オトミとなかがいいのも、

（オトミはおしゃべりが好きで、あたしはオトミのおしゃべりを聞くのが好き。だから、ちょうどいい。）

自分では、そう思っている。

一方、ヤーヤンは——ユカリとまるつきり反対だと思えばいい。いつも教室の話題の中心にいるのが、ヤーヤンで、新しい遊びをはやらせるのも、ヤーヤンで、五年の組みかえ後、四、五人の小さなグループにわかれてしまった一組の女子も、

「みんな、ちょっと来て——」

ヤーヤンのひと声で、さっと集まる。

「ねえ、みんなでカンけりしない？」

と、ヤーヤンがいえば、カンけり。ドッジボールといえは、ドッジボール。

もつとも、男子の中にはヤーヤンを、「女番長」なんていう人もいるけれど……。

「あなたはまじめな、はにかみ屋さん。ロマンチストで読書家。でも、消極的しょうきよくてきなところ、ちょっと問題ね。さあ、勇気を出して、みんなの中に……」

どうでもいいといった調子で、オトミがおとめ座のページを読みあげている。

（あたしには、びったりなただけだな。でも、ヤーヤンには……）

「何よ、それ。ぜんぜん、あたってないじゃない。」

ユカリの思ったとおり、けらけら笑わらいながら、ヤーヤンはいった。

「のどがかわいてたのに、がまんして聞いて、そんなしちゃった。だれか水飲みに行く人。」
くるつとうしろをふりむいたひょうしに、ヤーヤンの長い髪かみが、さっとユカリの顔を

なでた。

その日の帰り道。

学校の正門を出て、角を曲がったところで、ヤマとマコに手をふって、ユカリとオトミはいつものように、八幡さまの赤い裏門をくぐった。八幡さまと学校は、道一本へだてて、となりあつており、ここを通りぬけ、下のバス通りに出るのがユカリにもオトミにも一番近い。

うっそうと木の茂った境内には、竜宮城のようにそりかえった屋根の本殿、お祭りとお正月以外、いつも雨戸の閉まつているかぐら殿、そして、どす黒い水をたたえた、大きなコイのいる池があつて、以前は近所の子どもたちのいい遊び場だった。

〈境内でボール遊びをしないこと〉

何年か前に、あちこちに、そんな立て札が立てられるまでは――。

きょうは、本殿の格子とびらはあるいて、その奥に白いつくりをならべた祭壇が見える。さいせん箱の前で、一人のおじいさんが両手を合わせたまま、動かないでいるのを、見るともなしにながめながら、

「だけど、ふしぎ……。あたしとヤーヤンが同じ日に生まれたなんて……」

ユカリは、つぶやいた。いや、つぶやいたというより、心の中で思ったことが、そのまま口から出てしまったのだ。緑の多い、静かな境内に足をふみ入れたとたん、そして、ヤマともマコともわかれ、オトミと二人きりになったとたん――。

「そうかしら。あたしはべつに、ふしぎだとは思わないけどな。」

といって、オトミは、ふしぎだと思うほうがふしぎ、みたいに首をかしげた。

「だって、ユカリ、人間って、すごーくたくさんいるのよ。自分と同じ日に生まれた人なんて、何千人、ううん、何万人も何百万人もいるんだわ。たまたま、同じクラスに一人いたからって、ちっともふしぎじゃないわよ。」

「そうねえ、でも……」

相手がヤーヤンだから、ふしぎなのよ。そういおうとして、ユカリはやめた。

ヤーヤンだから、どうだっていうのよ。あたしやヤマやマコなら、どうなの。ちっともふしぎじゃないっていうの。

オトミはきつと、そういうだろう。いつもの早口で、機関銃のように、つぎつぎに質問をあげせるだろう。そして、そのどれにも、ユカリは答えられそうになかった。

ただ、胸の中にもやもやとした、割り切れない割り算のようなものがあるだけで……。

（あたしとヤーヤンが、同じ誕生日。あたしとヤーヤンが……）

そのふしぎな感じは、『ミニミニ星占い』の最後に（〇〇座生まれの有名人）という欄があって、それを見た時の気持とどこかに似ている。自分が歌手や作家、スポーツ選手や歴史上の人物（ユカリの場合は、トルストイ、吉田茂など）と、同じ星座だと知って、（へーえ、この人たちと……）

と思う、あの気持。自分と関係があるような、ないような。星座の代表に選ばれる人が、うらやましいような。それにくらべて、自分が平凡で、つまらなく思えてくるような。

「ユカリったら、まだ何か考えてるの。」

長い腕で、オトミがびしゃりとユカリの背中をはたいた。

「あんまり、ぼけーつとすると、車にはねられちゃうわよ。じゃあね。」

いつのまにか、もうバス通りの信号のところまで来ていたのだ。いったい、いつ、あの八幡さまの長い石段をおりて、大きな石の鳥居をくぐったのだろう。頭の中の考えをふりはらうように、ユカリは足をはやめた。

その日から、ユカリはヤーヤンのことが妙に気になりはじめた。

ヤーヤンの歩き方、しゃべり方、笑い方から給食のカレーライスの食べ方まで、すべてが気になってしかたがない。